

『多摩デポ通信』から

(株) カーリルとの共同研究 報告その1

2014年度の多摩デポ事業計画では、共同保存図書館の準備作業として多摩地域で最後の2冊に該当する資料のデータベース化を提案しています。これは、各図書館で除籍をしようとする資料が多摩地域で最後の2冊になっているかを容易に検索できる仕組みをつくり、各図書館が協力をして多摩地域で最後の2冊を保存し、共同保存図書館を実現するための下準備を行うことを目的としています。

この実現には、データベース運用に対する知識と技術が必要であり、多摩デポに対して専門的な知識や技術を提供してくれる人材が必要でした。

このため、他の組織との連携協力を模索してきましたが、適切に対応してくれる組織がないなか、(株)カーリル(代表:吉本龍司氏)が共同研究という形で協力を申し出てくれました。

多摩デポは、10月29日に(株)カーリルと共同研究に関する協定を結びました。

協定書の第2条(共同研究の内容と研究成果の活用)では、以下の3点を掲げています。

- (1) 公共図書館における資料の検索と同定、保存のための新たな技術の開発。
- (2) その他、新たな図書館サービスに関わる研究。
- (3) 研究の成果を活用して図書館支援を行うこと。

これに基づいて、今年度は多摩地域が所蔵するISBN付き資料で最後の2冊になっている資料のデータベース化を進めています。

また、このデータベースをつくる前提条件として、各図書館からのデータ提供などを受けることなく、公開されているデータを活用しながら当該データベースの作成を考えており、現在、国立国会図書館と国立情報学研究所のデータベースを活用し、ISBN付き資料の全件を抽出し、このデータと多摩地域の所蔵情報を掛け合わせてデータベースを作り上げることを行っています。

(株)カーリルとは現在月一回の運用会議を行い、データの抽出作業と多摩地域の所蔵情報との照合実験を行い、問題点を検討しています。

今後も、資料情報の抽出と照合を継続し、3月までには、モデルとなるデータベースを作り上げたいと思っています。また、データベースの定期的な更新の方法や各図書館が除籍する資料を照合しやすい仕組みについても検討しています。

なお、ISBNがない資料の問題は、当面、多摩デポが現在請け負っている検索作業をもっと活用してもらうことを考えていきます。

(初出「多摩デポ通信33号」2015年1月17日)

(株) カーリルとの共同研究 報告その2

(株) カーリルとの共同研究は、月一回の打ち合わせを行いながら順調に進んでいます。

現在、ISBNが付与されている資料を国立国会図書館及び国立情報学研究所のデータベースから抽出する作業が終わり、多摩地域の所蔵データとの照合を進めています。これによって、ISBNが付与されている資料で多摩地域で最後の2冊以下に該当する資料の状況がわかることとなります。

当然蔵書は日々動いていますからデータ更新は必要ですが、多摩地域で最後の2冊以下の資料のおおよその数量が判明します。

また、作成中のデータベースをどのようにしたら多摩地域の図書館が使いやすいのかを模索しています。

データベースの提供の方法——インターネットを使ったオンラインでの提供か、オフラインで提供する方がいいのか。各館が除籍しようとする資料が多摩地域で最後の2冊以下に該当するかを照合する時に、各館に負担をかけない作業方法は何かを検討しています。

抽出したデータの精度の検証も必要です。ISBNの精度のチェックや、各図書館のOPACの稼働状況によって照合のタイムラグが生じる可能性があり、適正に抽出が行われたかの検証も必要です。これらを実行し、より精度の高いデータベースの提供を考えています。

また、除籍対象の資料で、ISBNが無い資料の点検は、多摩デポが横断検索を請け負うことにしています。そのための検索マニュアルの充実も必要です。

5月の新年度通常総会時に、(株) カーリルとの共同研究の進捗状況について発表します。また、東京都市町村立図書館長協議会のプロジェクトにも説明を行い、活用に関するご意見をお聞きしたいと思っています。

話題は変わりますが、(株) カーリルからの提案によって、経済産業省主催、日本情報経済社会推進協会が募集した「オープンデータ・ビジネス・コンペティション」に応募しました。このコンペティションは、行政機関や自治体が保有するデータを利用可能な形で公開しているオープンデータを使って、地域振興やビジネス創出に活用する事業プランを募集し、優秀な作品を表彰するものです。

全国の33団体から応募があり、多摩デポは、第一次審査(2月16日)、受賞候補者審査(2月24日)を通過し、最終の10候補作品に選ばれました。3月3日の優秀作品を決める最終プレゼンテーションに(株) カーリルの吉本龍司代表と臨みましたが、残念ながら優秀賞は逃しました。

しかし、図書館の事業がこのような場面で審査・評価にかけられることは珍しく、今後の事業展開に弾みをつけるイベント参加となりました。

(初出「多摩デポ通信34号」2015年4月23日)

(株) カーリルとの共同研究 報告その3

・5月21日には、国立国会図書館の『カレントアウェアネス - E』のNo. 281に『共同保存図書館実現に向けた多摩デポとカーリルの共同研究』（多摩デポ理事：齊藤誠一）が発表されました。

(E-1673 <http://current.ndl.go.jp/e1673>)

・『情報の科学と技術』9月号には、「公共図書館の蔵書構築と共同保存事業—各館書庫からの除籍をどのように進めていくか?」という堀渡の論文が掲載予定です。

※本文は[こちらから](#) 雑誌本誌の紹介は[こちらから](#)

多摩デポとカーリルの取り組みが、外部に発信され始めています。この動きを追い風に共同保存図書館実現に向けた活動を継続します。

(初出「多摩デポ通信 35号」2015年8月1日)

(株) カーリルとの共同研究 報告その4

多摩デポでは昨年秋から、(株) カーリルと共同研究を行っています。

ある自治体の図書館で除籍候補となった資料が多摩地域全体ではまだ何冊残っているのか。最後の2冊、1冊になっていないか。各館で容易に確認できるシステム作りを進めています。カーリルはこの仕組みをほぼ作り上げました。しかし実用のためには仕組みの精度が問題になります。

今回、ある図書館に協力してもらい除籍資料約550冊のデータを提供していただきました。このデータを使い、カーリルのシステムで出した結果と、都立図書館が運用している「統合検索」を手入力で調べた結果を比較する、精度調査を行いました。

大半は同じ結果が得られましたが幾つかの問題点も見えてきました。

今回照合した資料は、ISBN（国際標準図書番号）が付与された資料に限られます。二つの検索方法で違う結果が出たタイトルは、その図書館のOPAC（オンライン利用者用目録）で再度検索したり、書名などでも調べました。

各館のOPACから直接取ったデータを使っているカーリルの結果と「統合検索」の結果が違う場合があるのです。「統合検索」では実は所蔵データが出てこない場合があります。そのケースを個々に検証しました。

その結果、幾つかの原因が分かってきました。例えばISBNには古い10桁コードと新しい13桁コードがありますが、その入力が適切でなく、うまく「統合検索」で拾えない図書館があります。長期延滞中の資料データを公開しているかいないかでも違いが出てきました。1980年代以前の発行物にISBNを後から付与した場合、書誌間違いを起こしていた場合もありました。これ以外に、コンピュータシステムを更新した直後の図書館では、システムが不安定で「統合検索」に対応しきれていない場合もあるようです。

カーリルシステムのエラーも見つかりました。ある館で同一書誌が書誌別れしている場合（同一書誌が一般と児童に分かれて所蔵されているような場合）、システム上認識していない場合がありました。カーリルで改善を図っています。

カーリル側では対応できない図書館自体の問題もありますが、分かってきた問題を図書館と共有することでより精度の高いシステムを構築することが可能だと思います。

ISBNが付与された資料の管理は、このシステムで処理できる見通しが見えました。今後多摩デポでは、ISBNが付与されていない古い資料の処理方法も大きな課題として検討を進めていきます。

(初出「多摩デポ通信 36号」2015年11月4日)

(株)カーリルとの共同研究報告その5

多摩デポと(株)カーリルとの共同研究は、順調に進んでいます。共同研究の目的は、ある自治体の図書館で除籍候補となった資料が、多摩地域全体では何冊所蔵されているのか、最後の2冊以下ではないのかを容易に確認し、各図書館が共同で資料保存をするシステム作りです。このシステムは、ISBN(国際標準図書番号)が付いた図書に限っては実用に耐えるものが出来上がりつつあります。

私たちは次のことを念頭に開発を進めてきました。①各図書館での作業負担が少ない方法を考える。②除籍候補資料が大量にある場合には、オフラインでデータをアップロードして行うことが出来る仕組みを考える。③除籍候補資料が少量の場合はオンラインで一冊ごとに入力し、調査が出来る仕組みを考える。④対象とする資料は各図書館で最後の1冊となっているISBN付き図書とする(それ以外の資料は別途対応を考える)。⑤モデルシステムを作り、多くの関係者に見てもらい、使い勝手の検証を行う。

前号では、②のシステムの精度を検証したことを報告しました。見つかった問題点は改良しました。

③の「少量の資料をオンラインで一冊ごとに入力し、調査する仕組みづくり」では、インターネット上の専用サイトの検索画面に調べたい図書のISBNを入力すると、瞬時に、多摩地域で何館、どの館で所蔵しているかを表示してくるシステムが出来上がりました。

そこで、このシステムを説明・発表する会を企画しました。3月21日(月・振替休日)午後15時に国分寺労政会館で中間報告会を開きます。これまでの経過や多摩地域の共同保存の動きを伝え、開発した新検索システムをご紹介します。複数のパソコンを用意し、多くの方に試してもらいたいと思います。

いままでの東京都立図書館の統合検索とはどう違い、どう便利なのか、情報の見せ方、使い勝手はこれで十分なのか、さらに付け加えたほうが便利になる点はないかなど、さまざまなご意見をお聞きしたいと思います。

ISBNが付与された図書に限られるため、発展途上のシステムですが、現段階でも共同保存の取り組みに負担感なく参加できるツールになっていると思います。ぜひおいで下さい。

(初出「多摩デポ通信 37号」2016年1月27日)